奨励

核災害と人間の自由

奨励	宇野 朗子〔うの・さえこ〕
奨励者紹介	３・11ゆいネット京田辺 原発いらない福島の女たち

最後に言う。主に依り頼み、その偉大な力によって強くなりなさい。悪魔の策略に対抗して立つことができるように、神の武具を身に着けなさい。わたしたちの戦いは、血肉を相手にするものではなく、支配と権威、暗闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊を相手にするものなのです。だから、邪悪な日によく抵抗し、すべてを成し遂げて、しっかりと立つことができるように、神の武具を身に着けなさい。立って、真理を帯として腰に締め、正義を胸当てとして着け、平和の福音を告げる準備を履物としなさい。

（エフェソの信徒への手紙　６章１０―１５節）

はじめに

今日は、このような場に、キリスト者ではない私のような者をお招きいただきまして、ありがとうございます。今年６月に、福島県会津若松市の若松栄町教会から私たち家族の恩人であります、片岡輝美さんがおいでになられ、こちらでお話をされたときに、私もお話をうかがったことをきっかけに今日のご縁をいただきました。心から感謝いたします。

お引き受けしましてから、讃美歌と聖書の一節は何がいいですかと問われ、「お任せいたします」とお答えしました。先ほど、三木先生が読んでくださいました、エフェソの信徒への手紙６章10～15節、ああ、これはまさに私のために選んでくださったものだと、感謝で胸がいっぱいになりました。お礼を申しあげます。私にはこうして、いつも必要な助けが、人の手が、言葉が与えられて、生き延びてきたように感じます。

私は、うのさえこと申します。

３年７カ月前の２０１１年３月１１日に起きました東日本大震災と、その日から始まりました東京電力原子力災害から避難をして今ここにおります。私は、１９７１年、今から43年前の今日、当時埼玉県に住んでいました両親のもとに生まれました。高校卒業までを埼玉で過ごし、東京の大学に進学し、その後、１９９９年、27歳の春、福島県福島市に移り住みました。

今日は、「核災害と人間の自由」というテーマで、お話をさせていただきたいと思います。

何かしなくては

福島に住んで８年後、私たちは子どもを授かりました。不器用ながら連れ合いと二人で子育てをする、平穏な日々でした。

２０１０年、娘が３歳になったばかりのある日、佐藤雄平福島県知事が、突然、これまで拒否してきた福島第一原発でのプルサーマル運転を条件付きで受け入れると発表しました。私はハッとしました。それまで、原発のことは問題だ、本当は反対だと思っていましたが、何か行動を起こすようなことはしていませんでした。しかし２０１０年のあの日、何か間違ったことが、とても恐ろしいことが始まろうとしている、止めるために何かしなくては、といても立ってもいられない気持ちになりました。そこで、一人の友人に相談の電話をし、３月３日、私たちは福島県庁にお願いに行くことにしました。

これが、私にとって初めての、原発を止めるための行動でした。

その日、広い福島県内各地から、30名ほどが県庁に集まりました。農業者、教師、地方議員、喫茶店をやっている女性、自給自足の暮らしをしている人、そして私のような主婦、年齢も性別も職業もさまざまでしたが、皆それぞれに原発を推進していく県や国の方針について、強い危機感を抱いている人ばかりでした。私たちは、それぞれの言葉で、私たちの想いを伝えました。

福島県には、原発が建てられてすぐから、またはチェルノブイリ事故の後から、原発の問題に警鐘を鳴らし続ける人びとがいることも知りました。

それから、勉強会を開いたり、署名集めをしたり、チラシを街頭で配ったり、何もかも初めてでしたが、幼い娘の手をひきながら、そんなことをやり始めました。

福島原発前で地震に遭う

その年の６月１３日、私は初めて、浜通りにある福島第一原発に行きました。延々とクネクネとした山道を通り抜け３時間半ほど、木漏れ日の美しい公園のようなその場所に降り立ってすぐに、震度５弱の地震に遭いました。悲鳴を上げ、友人の腕にすがりました。恐怖で身動きもとれないまま、地響きのなかで、走馬灯のように、家においてきた娘のこと、家族のこと、いろいろなことが頭の中を駆け巡りました。地震は幸いにも、すぐに止みました。

あまりにも大きな自然の力を前に、私たち人間は、どれだけ愚かで傲慢なことをしているのだろうと思いました。

実はその４日後に、外部電源全喪失事故という重大な事故が起きました。メルトダウンにもなりかねない、深刻な事故でしたが、真摯な原因究明と対策はとられることなく、再稼働されてしまいました。

この経験によって、原発を止めようと声を上げることへの、かすかにあった私の迷いは吹き飛ばされました。私はあの地響きのなかで、「躊躇も遠慮もいらない、前に進みなさい」という天からの声を聞いたのでした。

私たちはそれから、毎日、福島県庁の入り口に立ち、お願いを続けることになりました。

「ふるさとを第二のチェルノブイリにしないで」という横断幕を持って。

「マニアワナカッタ！」

２０１１年３月１１日。あの日の福島市は、底冷えする空気、今にも雪が降り出しそうな、灰色の１日でした。午後、いつもより早く娘を保育園に迎えに行き、二人で友人の家へ行きました。その庭先で、地震に遭いました。

私たちは地面に這いつくばりました。体験したことのない強い揺れは終わることはなく、どんどんと大きくなっていきました。駐車していた車がバウンドして前に進み、石塀がガランゴロンと崩れ落ち、電線がヒュンヒュンとうなりました。そして、ゴーッという地鳴り、ユッサユッサと力強く大地が揺れました。

「ママはここにいるよ、大丈夫だよ、大好きだよ！」

繰り返し娘に言いながら、私の心は浜通りの原発に飛んでいました。「ああ、これは大変な地震かもしれない、間に合わなかったのかもしれない・・・」、押さえられない吐き気のようにそんな想いがこみ上げていました。

それから約９時間後、原発メルトダウンの可能性が高いという情報を得て、私は友人と一緒に避難を始めました。子どもたちを遠くへ逃そう。私たちは吹雪の山を越えました。

翌朝、会津若松市の若松栄町教会に身を寄せさせていただきました。部屋は暖められ、お布団を準備してくださっていました。どんなにありがたかったことでしょう。そこは子ども園として使われていた部屋で、夜通し車の中でろくろく寝てもいなかったはずの子どもたちは、そこに入るなり歓声を上げ、遊び始めました。ちょうど日が昇り、部屋の中が金色の光で満たされ、その中を、子どもたちが走り回っています。憔悴していた私と友人は、そんな光景をただただ驚き、感動しながら眺めていました。

午後になり、新潟へ向けて車を出発してまもなく、カーラジオから、１号機が爆発したというニュースが流れました。

「マニアワナカッタ！」涙が後から後から溢れました。

娘が「ママ、泣いていいよ」と言い、連れ合いは黙々と運転を続けました。

外は静かな雪景色で、その美しさがあまりにも悲しく思えました。

「明日はここにも放射能の雨が降る―」。

私たちは、大阪、広島、そして娘のおじいちゃんの家のある山口県へと移動していきました。

放射能汚染のなかで―チェルノブイリの苦悩の再来

私たちが暮らしていた福島市は、飯舘村の北西にあり、放射性プルームが上空を通ったときに雨と雪となって放射能が降り注ぎ、ひどく汚染されてしまいました。

チェルノブイリの人びとが経験したことが、私たちの身にも降ってきました。

●政府による事故の過小評価と情報の隠ぺいが始まりました。ＳＰＥＥＤＩの情報隠しや、事故のレベルの過小評価に始まり、この３年と７カ月、その例は枚挙にいとまがありません。

●転々とし先の見えない避難生活の苦悩が始まりました。一方、避難を望みながらも汚染地に暮らし続ける人びとの苦しみと、故郷で骨をうずめることを望み留まる人びとの苦闘もあります。

●日本では、強制避難区域は最小限に切り詰められました。そしてせっかくいったん設定されても解除されてきています。チェルノブイリ法には存在する「避難の権利区域」にあたる区域を設けられておらず、基本的に避難移住をさせない政策がとられています。そのため、避難する・しないが個人の選択の問題となり、それによって、人びとの間に深い亀裂が生まれました。

●事故の収束作業にあたる人びとの犠牲という問題も共通しています。チェルノブイリ事故では、人びとが強制的に動員され、生命と健康を奪われていきました。日本では、貧困や

被災による経済的逼迫など、経済的な強制によって、この高度に危険な被ばく作業が、十分な保護や保障もなく行われています。そうして損なわれた生命や健康は、その人につながる家族、子どもたちの生活の破壊へと直結していきます。今後長年にわたって、この綱渡りのような作業に膨大な数の人びとが従事しなければなりません。数年後、大きくなった子どもたちが、これらの作業に従事することになっていくでしょう。今のチェルノブイリ原発の石棺が、事故当時を知らない世代によって、修理維持されているように。これが、子どもたちの人生に与える影響の大きさは、計り知れません。

●そして健康の問題があります。チェルノブイリの被害地域に暮らす子どもたちの作文集で、『私たちの涙で雪だるまが溶けた』（チェルノブイリ支援運動・九州編　梓書房　１９９５年）という本があります。チェルノブイリ事故がもたらした人びとの健康と生命に対する深刻な被害が綴られています。親、兄弟、親戚、友だちを失う悲しみ。慢性的な病気や症状を抱える子どもたち。何人かは、致命的な病を抱え、おそらく余命少しと考えられている状況で、作文を綴っています。重すぎる将来への不安、これらの現実を知るとき、心の底から悲しみとそして恐れに襲われます。福島では、事故が３年７カ月続くなかで、子どもたちのなかから甲状腺がんが１０４人見つかっています。福島県にとどまらず、汚染のあった東日本の広範な地域で、下痢、鼻血、脱毛、感染症の流行や重度化、アレルギーの悪化、若年者の突然死、白血病、ある種の難病の増加傾向、等々が指摘されています。被ばくとの因果関係は証明できない、でも、人びとは健康の異変と、健康への底知れぬ不安を抱えています。そしてこれもチェルノブイリと同様、政府は、予断を許さず科学的に事態を調査・公表し、人びとの健康被害を未然に防止するための有効な対策をとることをしておらず、被ばくによる健康影響はないと結論づけることにエネルギーを注いでいます。

ささやきに抗して

ずっと、「あきらめなさい」とどこかからささやく声が聞こえてきます。
もう事故は起きてしまったのだから。故郷は汚染されてしまったのだから。そしてもう全国に、世界に、ばらまかれてしまったのだから。
あきらめなさい。もう、子どもたちは被ばくしてしまったのだから。
あきらめなさい。因果関係は証明できないのだから。
あきらめなさい。国は避難を支援はしてくれないのだから。
あきらめなさい。私たちは電気なしには生きていけないのだから。原発なしには、生活できないのだから。
あきらめなさい。もう核のゴミは生み出されてしまったのだから。
あきらめなさい。
最近はこんな声が聞こえてきます。
あきらめなさい。南相馬市の特定避難勧奨地点は、たとえその住民７５０人全員が指定解除に反対していたとしても、指定解除はされるのだ。あきらめなさい。
あきらめなさい。反対を押し切って避難指定解除された田村市都路地区に、まだ帰っていない世帯は、追加で除染をしてあげよう。これであきらめて、帰ってきなさい。
あきらめなさい。近隣住民が不安の声を上げても、今日から、福島第一原発１号機の建屋カバーの撤去作業は始める。放射性物質は飛散しないことになっている。それを信じて、あきらめなさい。
あきらめなさい。あきらめなさい。あきらめなさい・・・。

でも、あきらめない私たちがいます。

日本では、この３年と７カ月、多くの希望の動きが始まっています。私たち普通の市民が、力を合わせて、さまざまな活動を生み出してきました。自主避難や保養を支援する活動、除染に関わる活動、市民放射能測定所の設立、政府や行政に対するさまざまな交渉、署名やデモ。原発事故の責任を問う裁判や告訴運動。再稼働を止めるための活動。避難者が支援者とつながり、避難移住生活を支えあう活動。心ある国会議員も活躍しています。２０１２年６月に議員立法された「原発事故子ども・被災者支援法」は、健康障害の未然防止と避難の権利も含む、原発事故被災者の自己決定を尊重する、とても重要な法律です。これを基に具体的な支援につなげていくためのさまざまな努力が続けられています。消費文明を問い直し、暮らしを根本から変えようとする人びと。真の民主社会をつくるため、政治を市民の手に取り戻そうと、多くの人が行動を始めています。

そして何よりの希望は、私たちが生きているということです。日々、子どもたちが成長し、新しいいのちが生まれていることです。

現実を見つめ、未来を信じて再出発する

この国で、起こしてはならなかった原発過酷事故が起きてまだたったの３年７カ月。「マニアワナカッタ」と何度涙を流したとしても、私たちはその現実から再出発し続けるしかありません。子どもたちが生まれ、生きる、たったひとつの世界がここにあるのだから、と思います。

●メルトスルーした事故原発を安定的に管理し続け、放射性物質の放出量をできるだけ最少にすること。
●近い将来にくるであろう次の巨大地震に備え、第二、第三の原発震災発生を食い止めること。
●被ばくによる被害、人びとの生活破壊を最小限にすること。
●明日、巨大地震がきて、世界が崩れ落ちるとしても、私たちは未来を信じて最善を尽くすこと。

その努力をしながら、子どもたちが安心して成長できる「日常」をなんとしても作っていきたい。そう願っています。
それが、今の私の、核災害のなかを生きる今の私の、「自由」を求める道です。
ご清聴、ありがとうございました。

２０１４年１０月２２日　京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録